

第9回 ICT を活用した歩行者の移動支援に関する勉強会の概要

1. 開催日時等

日 時： 平成25年2月21日（木） 10:00～12:00
場 所： 中央合同庁舎3号館4階会議室
座 長： 坂村 健 東京大学大学院情報学環教授
委 員： 岩下 恭士 毎日新聞社デジタルメディア局ユニバーサロン編集長
後藤 省二 三鷹市企画部地域情報課担当部長
立松 英子 東京福祉大学社会福祉学部教授

主 宰 者： 坂井 学 国土交通大臣政務官
行政側出席者： 総合政策局、都市局、水管理・国土保全局、道路局、鉄道局、港湾局、
航空局、国土技術政策総合研究所、国土地理院、観光庁
事 務 局： 国土交通省 政策統括官付

2. 委員からの主な意見

第9回の勉強会では、多様な主体による情報提供を行っている事例をもとに、多様な主体による歩行者移動支援サービスの運営における課題やその対応などについて議論された。また、現地での実証実験の取組みとして、今年度実施している群馬県渋川市地区の事例を紹介し、そのサービスに対する意見交換を行った。

- （1）多様な主体による情報提供の構造及び多様な主体による歩行者移動支援サービスの運営における課題や対応について
- 昔は国が全てを行うモデルが主体であったが、今は、積極的に国が実施しなくても済むモデルが出てきている。歩行者への移動支援を行うこの事業についても同じで、国が全てのサービスを行うことは難しい。オープンデータなどの新たな仕組みを作り、バリアフリーマップをオープンで作成していくことが重要。
 - 国交省の課題として、許認可官庁からの脱皮が必要。米国の政府が強力に進めている Gov2.0 という、政府関係のデータをオープンにして民間も利用することで今まで国ができなかったサービスをみんなで作ろうという考えには、事後審査の方が適している。歩行者移動支援サービスにおいては、全ての人にベストなインターフェースはない。サービスの運営と管理を別の仕組みとすることが必要。
 - データと API (Application Programming Interface) は別物。公開している各人がそれぞれのサービスを展開すればよい。データについては、誰かが保証する必要がある。国も保有しているデータを公開すべき。
 - アプリ開発の活性化には、コンテスト（競争）方式（例、エックス・プライズ方式※1 など）が望ましい。
 - 事後審査の形が進んでいる米国では、ベストエフォートのサービスを意識。日本では、この勉強会のような仕組みを活用して検討していくことが必要。
 - サービスに適した形としては、データについてはギャランティ型※2、アプリケー

ションについては分散ベストエフォート型。

- 障がい者に関する様々なデータや表現では、Wikipedia の記載は誤りが少ない。これは、情報の精度を確保する仕組みが有効に働いているためと思われる。オープンデータについても、チェックの仕組みが重要。
- Yahoo!知恵袋のベストアンサーなど、インセンティブを与えていく仕組みは、歩行者移動支援のシステムにおいても有効。
- 歩行者移動支援サービスの運営において、ステークホルダーとして基礎自治体の役割は重要。サービスの継続のための仕組み作りには、国の一定の支援が求められる。サービスに必要な規格や基準は国がまとめるべき。
- これまでの社会福祉は金銭保証が主であったが、これからは新たなサービスや仕組み作りにより、金銭保証だけではない福祉が求められる。歩行者移動支援についても、モデル的に国の役割をまとめていくことが重要。
- NPO も運営を継続する仕組み作りが必要。三鷹市の例だが、まちづくり三鷹が総務省の ICT を活用した街づくり事業において、公衆無線 LAN (Wi-Fi) を活用したサービスを実施。
- IT 系の愛好家の活用の事例として、三鷹市では Ruby^{※3} というプログラム言語を用いたプログラミングコンテストにより、子育て支援ポータルサイトを立上げ。
- サービスの運営に障がい者自身が入ることを念頭に置くことが必要。
- サービスの利用者と運用者が直接つながらなくてもサービスが受けられる仕組みを作ることが大切。利用者がデータ等を自由に使用できる仕組みが重要。
- 歩行者移動支援サービスでは、Push 型^{※4}のサービスが望ましいが、OS に依存 (Apple は Push 型不可、Android では Push 型は電池の消耗が著しい) している現状。
- 以上を踏まえると、このサービスではベストエフォート型が望ましい姿である。

(2) 実証実験の紹介〔群馬県（渋川市）地区での取り組み事例〕

- まちづくりにつながるこのようなサービスをどんどん進めていくべき。オープンデータとして、サービスをオープンに進めていけばいいのではないか。
- 位置測定の精度としては、補正技術の進歩により、2 年前くらいの端末に比べて格段に精度が上がっている。
- H25 以降のサービス運営については、配信端末の OS ヴァージョンアップ分を除けば、比較的安価なサーバの運用費用だけで済むため、運営を継続できるよう検討中である。
- コスト面での視点からもオープンソースにしていくことでのコスト抑制が重要。
- 視覚障がい者の視点から、今回のアプリに音声案内（読み上げソフト）対応のコンテンツを作ってもらいたい。
- 伊香保でのサービスにおいては、シャトルバスとの連携など検討してはどうか。

以上

〔注釈〕

※1「エックス・プライズ方式」…科学技術における様々なコンテストを通して、技術向上に寄与することを目的としている財団が採っている方式で、コンテストを通して、最も良い結果に対して予算をつける方式のこと

※2「ギャランティ型」…サービスの品質が保証された通信サービス

※3「Ruby」…ソフトウェアのプログラミング言語の一種。特徴は、ソースコードが公開されていること(オープンソース)

※4「Push 型」…ユーザの能動的な動作によらずに、自動的に配信されるタイプの技術やサービス